

相互唱による短詩型定型詩の

解釈のあり方

—— 中華人民共和国広西壮族

手塚 恵子

自治区武鳴県壮族の事例から——

はじめに

武鳴県⁽¹⁾のフォンを記録したもので公表されているのは、李方桂⁽²⁾、Banh Mingsun⁽³⁾、Hoz Gwngzwiz⁽⁴⁾の三冊のテキストである。これらのテキストは壮族⁽⁵⁾の伝統的な書き言葉である方塊字⁽⁶⁾を用いて記載された歌本をもとに、作製されている。武鳴県の資料にかぎらず、公刊されたテキストに記載されたフォンは、句数も揃っており言葉づかひも上品であることが一般的である。しかし惜しいことに、それらは中心的な部分だけを探っていて、挨拶や相手を見定める部分を欠いていることが多い。というのも、そもそも歌い手のなかで傳承されてきた歌本が、普通それらの部分を欠くものとなっているからである。しかし実際の歌の掛け合ひでは、時間的な制約や好みの問題で、中心的な部分をうたわないうちに終了することはあっても、挨拶や相手を見定める部分をうたわないうちで歌の掛け合ひをおえることはありえない。

私は一九八六年から武鳴県を中心とした広西壮族自治区にお

いて、歌謡を中心とした壮族の文化傳承について、フィールドワークを行っている。フィールドワークを進めるなかで、私はテキストに記載されたフォンと実際に歌の掛け合ひの場であつたフォン⁽⁷⁾の間に、いくつかの面で質的な違いがあることを知つた。そこでフォンの掛け合ひの最初から終わりまで録音し、テキストを作りたいと願つていたが、残念ながらすぐにはその機会に恵まれなかつた。

さきに公刊されたフォンのテキストはすでに存在する歌本をもとに作成されていると指摘したが、それは歌本に記載されたフォンが洗練されているという他に、うたわれたフォンからテキストを作成することに、たいへんな労力が必要とされるからであつた。

事の性質上、私ひとりの力でこの作業をやりとげることには不可能である。私は条件を満たす協力者が揃うのを待った。その条件とは、そのフォンがうたわれる現場に私とともに立ち会うこと、アルファベットで表記される壮語の現代書き言葉と伝統的な壮語の書き言葉である方塊字の両者に堪能であるというこ

とである。(もちろんこの骨の折れる作業に耐えられるだけの「うたぐるい」であることが、なによりも重要な条件であることはいうまでもない。)

一九九三年になって、幸運にもメンバーが揃うことになった。壮語の現代書き言葉の制定者である言語学者の草星朗と地元の歌い手である将宏、草仕花である。私たちは一九九三年の歌掛け祭のシーズンに、多くの歌掛けを録音した。そして録音テープを検討した結果、武鳴県東部地域の苞橋村で録音したテープから、テキストを作成することになった。

テキストの作成は、録音の段階から二回目のテキストの解釈にいたるまでの作業を共同で行うことになっていった。私たちは寝る間を惜しんでテープ起こしを続けた。作業の初期の段階では私たちの誰もがこの作業に夢中になっていたのである。しかしやがて注釈作業に入ると、将宏と私たち(私と草星朗)の間に、秋風が吹き始めた。そしてそのことが、私に歌のテキストを解釈することの難しさを、気づかせたのである。

ふたつの解釈

次にあげるのは、注釈作業のなかで問題となった(結局それは全てのフォンの問題でもあったのだが)フォンのひとつである。

101 乞食は市が混乱するのが好きなものだ。

店先の皿をとる。

少ないのはいやだ。多いのがよい。

帯を解いて満腹。

異文化からやってきた私は、この地域の乞食の生活のありようを知らない。そしてそのためにこのフォンがわからないと考へ、この地域の乞食の生活のありようを知りたいと思う。

民国の末期、しばしば匪賊がこのあたりの定期市を襲った。匪賊がやってくると店主は逃げ、露店は無人となった。乞食は無人となった露店を回り、好きなだけ飲み食いをしたものだという。

私は知識として得た民国期の乞食の振る舞いを手がかりにして、101のフォンを次のように理解する。

匪賊に襲われて定期市は大混乱に陥っている。乞食は無人となった店先から大盛りの皿を取っては食べる。満腹するまで食べる。

ところでこのフォンを受けた相手方は次のようにうたい返している。

102 シュウねえさんはより有名だ。

早くから人と約束してある。

余ったお粥を食べることを、

あなたには回ってこない。

シュウねえさんは実在した人物であるが、私が東部地域で調査を始めたころには既に亡くなってしまったらしい。シュウねえさんがどのような人物であるかを知らない、このフォンはわからない。私はシュウねえさんについて知ろうとする。

シュウねえさんは最近亡くなった鳳林村の乞食である。彼女は村に居ついた盲目の乞食だった。彼女はモノを貰うのがうまかったのだという。

私はシュウねえさんがどのような乞食であるかを知識として知り、102のフォンを次のように理解する。

シュウねえさんは有名だ。余ったお粥を食べられるようにあらかじめ村の人と約束してある。彼女がそれを食べる時、あなたにとり分はない。あなたは市が混乱してはじめてご飯を手に入れる。シュウ姉さんには毎日村人の残り物がある。

このように、私はひとつひとつのことに、できるだけ丁寧な注釈をつけようとしていた。ひとつひとつの言葉を丁寧に理解していけば、やがてフォンは理解できるのだと考えたのだ。そのため作業は遅々として進まなかったが、自分の仕事の進め方にそれなりに満足していた。しかし念には念を入れ、今度はひとつひとつの言葉や事象ではなく、将宏にこのフォンそのものを解釈してくれるように頼んでみることにした。すると驚く

ことなかれ、彼は次のように解釈したのである。

わたしは歌い手だ。あなたが失敗するとうれしい。自分が利を得るから。(101)

わたしの歌の方がすごいね。(102)

私には将宏の解釈を理解することができなかった。壮語を自由に使いこなせない私が将宏の解釈を理解できないのは不思議ではない。しかし韋星朗もまた将宏の解釈を全く理解していなかったのである。私たちは将宏の解釈に疑問を持ち、共同作業の相手としての彼の資質に不信感を持った。そこでそれを他の信頼すべき歌い手に解釈させてみようと考えた。

私たちが依頼したのは、経験を積んだ南部の歌い手だった。幸い彼は現代壮語を読み書きすることができた。東部と南部のフォンは旋律は異なっているものの、詩形は同じである。記述されたものならば彼にも理解できるに違いないと、私たちは考えたのである。

しかし南部の歌い手は、私たちの持ち込んだテキストをじっくりと眺めると、「ひとつひとつの言葉はわかるけれども、でもわからない」と語った。

私たちが録音したフォンは武鳴県東部のものである。そして私たちの依頼した南部地域の歌い手は、その東部地域に隣り合う地域に住んでいた。そのため彼は定期市での匪賊と乞食がどのような振る舞いをしたかという知識を、東部地域の人々と共有していた。したがってこのフォンに対して「匪賊に襲われて

定期市は大混乱に陥っている。乞食は無人と化した店先から大盛りの皿を取っては食べる。満腹するまで食べる」という解釈を与えることは、南部の歌い手である彼にはたやすいことであつた。しかしそれではこのフォンはわかつたことにはならぬ。地元の歌い手はこのフォンをそのようには解釈していないと、彼は言ったのである。

さてこの南部の歌い手のように、言葉の字義通りの意味と言葉が伝えようとしていることとは異なっていると考える者は、他にもいないわけではない。例えばウイルソン・スベルベルは、彼よりも洗練された方法でそのことについて言及している。ウイルソン・スベルベルに従えば、文の意味を表示するのはその文を使った発話全てが共有する意味の共通核のようなものを提示することであり、一方発話を解釈するとは、その文に對して聞き手の発話を含む曖昧な表現の表現する意味は何か、不完全な表現の意図しているものは何か、指示表現のいとしている指示物は何か、字義通りの意味を伝えているのか、メタフオリカルな意味を伝えているのか、本気で言っているのか、皮肉を言っているのか、現実の状況を述べているのか、想像上の状況を述べているのか、などを決定していくことをいうと述べている。

再び南部の歌い手にもどれば、彼は文の意味表示とフォンが伝えようとしているものには違いがあることを、これまでの経験から体得していたのだろう。そして彼はその認識にもとづいて、彼がこのテキストから読みとることができるのは文の意味だけであること、文の意味を理解することは必ずしもフォンを

理解することにはならないことを、私たちに示唆したのである。

フォンを解釈する上で、文の意味とフォンの示すものの違いについて、困惑したのは私たちだけではなかつた。壮族の民俗学者の陳雨帆³もまた、私たちと同じような経験を持っている。

陳雨帆は調査旅行の途中、広西壮族自治区平果県の洞窟で、革命当時流行していた工農革命歌やインターナショナルと並んで、男女の恋をうたった夥しい数のフォンが書き付けてあるのを見つけた。陳雨帆はフォンの文の意味からこれは恋愛の歌だと考え、インターナショナルとならんで恋の歌が書き付けられている理由を、地元の歌い手にたずねたところ、地元の人はこれらにフォンは恋の歌ではなく、インターナショナルと同じように赤軍の遊撃隊がここで歌会を開いたときにうたったもので、革命の思いを述べたものだと言つたと記し、壮族のフォンを理解することの難しさを嘆じている。

壮族の歌い手ならば、文の意味を理解することとフォンを理解すること異なるレベルの行為だということは、改めて言うまでもないことなのであろう。しかしそれは、テキストの文の意味に拘泥している私たちや陳雨帆にとつては、にわかには信じられないことなのである。

分別

私と韋星朗は南部の歌い手に拒絶されたことで、将宏の解釈の是非を問いただすべを失つてしまった。と同時に隣の郷に住む者にさえ理解しかなるような解釈があり得ることを知つ

た。将宏の解釈がどのようなものであれ、彼に導かれるのであれば、いかなる解釈も得ることはできないだろう。私たちは再び将宏のもとへ舞い戻った。

67

山芋を人は食べるだろうか

ハリネズミに残しておいてやるのではないだろうか
私たちのところではそうしてきたよ

苦棟樹の実は木の上に残っている

毎年たわわに実をつけても

四方いたるところで大きくなっても

山芋を人は食べるだろうか

ハリネズミに残しておいてやるのではないだろうか

わたしたちの地方は

干ばつという言葉を口にしたことはない

私たちのところではそうしてきたよ

苦棟樹の実は木の上に残っている

将宏は67に「あなたのフォンはいらないものだ」という解釈を与えていた。私は、このフォンのそれぞれの語の意味をはつきりさせてから、それらが何に例えられているのかを教えてくれるように将宏に頼んだ。皿のフォンが「匪賊に襲われて定期市は大混乱に陥っている。乞食は無人となった店先から大盛り皿を取っては食べる。満腹するまで食べる。」という解釈と

「わたしは歌い手だ。あなたが失敗するとうれしい。自分が利を得るから。」という解釈をもち得るのなら、それらの解釈の間を対応させているコードがあるはずだ。それを再構築することができれば、将宏に見えているものが、私にもわかるだろうと考えたのである。しかし将宏は「フォンの（語の）ひとつひとつは説明できない。全体でならできると繰り返し主張し、私の申し入れを拒絶した。

彼の「フォン（語の）ひとつひとつは説明できない。全体でならできると」という強い主張から、フォンによって伝えられるのは、「ハリネズミに残しておいてやる山芋」「毎年たわわに実をつける様」といった特定なものではなく、ハリネズミに残しておいてやる山芋」「毎年たわわに実をつける様」といった表現によって呼び起こされる連想の集合であると彼が考えていたことが（今の私にはよく）わかる。

さてここで問題となるのは、フォンが複数の歌い手が相互にそれをやり取りするという形でうたわれるものであるということである。そこでは、自分のフォンをうたうためには、まずその直前に相手方のうたったフォンを理解することが前提となる。果たしてそのような相互依存的な場において、双方が依拠できるコードもなしに、様々に連想可能な表現から相手の意図を的確に理解することは可能だろうか。私の問いに将宏はどのように「分別」をしていくかを自分で知っていればできると答えた。

先にあげた67は将宏が高い評価を与えたものである。フォンを聞いたりうたったりするには「分別」することが必要だと、

日頃から口にしている将宏が高い評価を与えた67には「分別」が見られるはずである。

- 1 山芋を人は食べるだろうか
- 2 ハリネズミに残しておいてやるのではないだろうか
- 3 私たちのところではそうしてきたよ
- 4 苦楝樹の実は木の上に残っている
- 5 毎年たわわに実をつけても
- 6 四方いたるところで大きくなっても
- 1 山芋を人は食べるだろうか
- 2 ハリネズミに残しておいてやるのではないだろうか
- 7 わたしたちの地方は
- 8 干ばつという言葉は口にしたことはない
- 3 私たちのところではそうしてきたよ
- 4 苦楝樹の実は木の上に残っている

将宏はここから何らかの連想を呼び起こさなければならぬ。しかし彼はこの課題に素手で取り組むは必要はない。彼は日頃「我々のフォンはふたつの句にかなうようにしなければならぬ。ふたつの内容は同じでなければならぬ。もしもそれが違うことをうたっているようであれば、それは使用に耐えないものだ」と強調していた。彼はこの規範を利用して、繰り返して三度表現されるものから何らかの連想を得ればよい。

まず1234では食用にはならない山芋が苦楝樹の実と同じように余っている様が、5612では毎年呆れるほど多くの山芋が余る様が、7834では干ばつの年ではないので木の上で残っている苦楝樹の実がうたわれている。三度とも食用にならない植物が多量に余っている様子を表現している。

ここまでならば南部の歌手にも理解できる。将宏はさらに一歩踏み出さなければならぬ。「食用にならない植物が多量に余っている状況」だけでは、持て余している状態を示しているだけなので、それをおく文脈によってどのようにでも解釈できそうである。しかしここでも彼は素手ではない。彼はこの掛け合いを始めから聞いているので、一連のフォンの文脈を知っている。フォンのここまでの文脈は、「相手のフォンよりも自分のフォンが優れていることをしめすこと」である。彼はその文脈を参照して、持て余しているのは相手のフォンだと見なし、67に「あなたのフォンはいらぬものだ」という解釈を与えることができる。

さて、次にあげる60は将宏の評価の非常に低かったものである。先にも述べたように、将宏はフォンの掛け合いと「分別」には強い結びつきがあるとみなしているから、彼が低い評価しかを与えなかった60では「分別」が十分に働いていないと考えられる。

60

- 1 桂林の瓶づめ酒は
- 2 一斤しかはいらない
- 3 心がけのよくない者がむさぼる心をもっている

4 かえってそれは溢れ出るだけだ

5 不健康な者は

6 行ってみてごらん

1 桂林の瓶づめ酒は

2 一斤しかはいらない

7 信じないなら見てごらん

8 お金をむさばらないよ

3 心がけのよくない者がむさばる心をもっている

4 かえってそれは溢れ出るだけだ

60のフォンもまた67と同様に、相手のフォンよりも自分のフォンが勝れていることを主張する文脈のなかで、うたわれている。

まず1234では規定量以上を注いでもこぼれてしまう瓶入りの酒が、次に502では健康にすぐれない人と規定量以上は飲むことのできない瓶入りの酒が、さらに7834ではお金をむさばらない様子がうたわれている。

60では、送りの「相手のフォンよりも自分のフォンが勝れていることを示すこと」が文脈としてあり、フォンから思い起こした三種類の連想がある。受け手は、文脈と連想を照らし合わせて、解釈しなければならぬが、それぞれの連想がちぐはぐなため、それと文脈をすり合わせることでできず、解釈がその像を結ぶことができない。

67のように十分な「分別」のあるフォンでは、文脈と連想をすりあわせる事ができるので受け手は解釈を得ることができ、60のような「分別」の不十分なフォンでは、文脈と連想をすりあわせる事ができないので、受け手はフォンの解釈を得ることができない。

私たちは、フォンのなかの語から呼び起こすことのできる連想と、その直前までフォンがどのような流れのなかでうたわれてきたかという文脈の両者が備わっている場合のみ、フォンの解釈を行うことができる。将宏はこの仕組みを「分別」とよび、フォンをうたうためには、まずフォンを解釈する仕組みを自分のものにする必要があることを、私に示してくれたのであった。

おわりに

さて冒頭で記したように、この地域においても、何種類かの歌本が書き継がれてきている。歌本は将宏たちの古典であるといつていいかもしれない。しかしこの歌本には、誰がいつどこで何のためにうたったのかという詞書きもなければ、冒頭や終末の部分のフォンもないのである。将宏がいうようにフォンを解釈する上で「分別」が重要だというならば、なぜ歌い手たちが筆をとって書き記してきた歌本には、文脈を知る上で大切な役割を果たすであろう、冒頭や終末の部分のフォンが削られていくのだろうか。あるいはまた誰がいつどこで何のためにうたったのかという詞書きを欠落させているのだろうか。彼らはどのようにして歌本をよんでいるのだろうか。

(注1) 広西壮族自治区の中心地、南寧市の近郊にある農村地

帯。標準壮語の標準音に指定された地域であり、ある意味では壮族の文化の中心地といえる。

(2) 李方桂 『武鳴土語(单刊甲種之19)』中央研究院歴史言語研究所 一九五六年

(3) Banh Mingzsun Fwen Youx yimingz Gvangsish minz-cuz cuzbanjse 1982

(4) Hoz Gwngzvwvz Fwenz Leux Gvangsish minzcuz cuzbanjse 1985

(5) タイ系の言語を話す中華人民共和国最大の人口を持つ民族。広西壮族自治区、雲南省などに居住する。中国では最も歌に秀でた民族として知られる。

(6) 壮語を表記するために作られた、漢字の造字法をまねて作った表記法。統一した記述体系が定められる機会がなかったために、通用する範囲はたいへん狭い。厳密にいえば、同じ系譜に連なる歌い手だけの間でのみ、完全に理解される。もっとも全ての歌い手が文字を読み書きできるわけでもない。この表記法を用いることのできる者はそれほど多くはない。

(7) 中華人民共和国成立後、政府によって制定された壮語の記述法。学術的な言語調査に基づいて、その音を厳密に記述するべく立案された。しかし方言差が大きくかつ標準壮語の普及が進まなかった広西壮族自治区では、これを自由に操れる者はほとんどいない。

(8) Dスベルベル、Dウィルソン(内田聖二他訳)『関連性理論』研究社出版 一九九三年 一四二―一九九頁

(9) 陳雨帆「壮族歌会初探之二」『広西民間文学叢刊』七

広西民間文学研究会 一九八二年 一三七―一四六頁

(10) 伝統的な記述法では五言十二句のフォンは五言八句で記される。すなわち、1 2 3 4、5 6 7 8と記し、1 2 3 4、5 6 1 2、7 8 3 4とつたう。